

明星学園2023年度 公開研究会

2023年11月25日

内田樹氏講演

皆さんこんにちは、内田です。

特に演題を決めていないのですが、授業を公開して外部の方に見て頂いて明星学園の教育が独自すぎないように、一般の人から見たコメントを加えて頂きたいという趣旨だと伺いました。僕も授業を聞いていましたが、非常に興味深い授業の進め方だなと思いました。

教育の一番大事なことはいくつかありますが、その一つは、とても自分にはできませんが、生徒全員の固有名を把握しているということです。これはすごく大事です。一人一人名前を呼んでいく。30何人だからできるのかもしれないけれども、全員を固有名で承認していくというのは教師にとって大切な仕事だと思います。

固有名で呼ぶというのは、「あなたはここにいる」と確認すること、「ここはあなたがいていい場所だ」と伝えることです。まず子どもたちに居場所を保証する。「あなたにはここにいる権利がある」と伝える。固有名において子どもを承認する。それがきちんとできていたと思いました。

あともう一つ感じたことは、つぶやくように語る生徒の声を必ず拾っていたということですね。

先生が注意ぶかくて、教室の音響環境がよくなないと、つぶやくような声は拾えません。今の学校建築はどこも床も壁もコンクリートですから、声が残響してしまう。先生の声も生徒の声も非常に聴き取りにくい。

ですから、学校の新築をする時にぜひ気をつけて欲しいのは、教室内で声がどう聞こえるかです。音響環境を整えるというのは学校教育にとって死活的に重要なことですが、ほとんどの建築家は教室の中で音がどのように響くのかについては考えていない。

僕は神戸女学院大学に長く勤めていました。以前、新校舎を建てる時に、大学側の委員として、建築事務所と建築計画を話し合う場に立ち会ったことがあります。その時に「音響はいかがですか」と聞いたら、「ふつうです」という返事が返ってきました。「ちゃんと遮音はできています」というので、僕が知りたいのは外部の騒音が入ってこないかどうかではなくて、教室の中で人が話す声はどう聞こえるかということでした。それについては考えていないと建築事務所の人は答えました。学校教育における声の重要性を真剣に考えている人がいかに少ないか、その時に知りました。

神戸女学院は、ウィリアム・メレル・ヴォーリズという、宣教師で建築家かつビジネスマンという変わった人が昭和初期に建てたものです。同じ西宮の関西学院にも近江八幡にもヴォーリズの建築は教会、学校などたくさんありますが、僕は神戸女学院のヴォーリズ建築が彼の最高傑作だと思っています。これは想像ですが、たぶん施主が建築家に「好きにやっていていいよ」と言ったのだと思います。

建物自体の外形は、国の重要文化財に指定されたくらいですから、立派なものなのですが、ヴォーリズ建築の本質は外見にはありません。建物の中で暮らしてみないとわからない。僕がヴォーリズの建物の教室で授業を始めた時に驚いたのは、教室での声の通りが素晴らしいことでした。かなり大きな教室でも、階段教室でも、マイクなしで後ろまで声が届く。学生たちの小さな声も教壇まで届く。ゼミ室のような小さな教室では、ささやくような声でも聴き取れる。これがどれほど教育にとって有意義な環境であるのかは、実際に教え始めてみてよくわかりました。

教師が決して言うてはいけない言葉は「大きな声ではっきりと」です。子どもの中から今湧き出したばかりの泡のような、星雲状態のようなアイディアは大きな声になるはずがないし、はっきり言えるわけがない。まだ輪郭ができていないアイディアは、つぶやくところから始めるしかない。言い淀み、絶句し、同じところをぐるぐる回り、あるいは途中まで行って前言撤回し…そういうプロセスを通じて、ゆっくりと言葉が生成してゆく。人間の中で新しい思念や感情が言葉になる時、それはつぶやくように、小さな声で発される。ですから、それが聴き取れるか聴き取れないかは、子どもたちとのコミュニケーションを立ち上げるためには決定的に重要です。

さきほど参観した国語の授業の先生は、後ろの方の小さな声で言いかけた子たちの声を拾って反応している点がとてもいいなと思いました。生徒たちも、すでにパッケージされたアイディアを出力するのではなくて、自分でも何を言いたいのかよくわか

らない状態から話し始め、なかなかうまく着地できないでいる。それでいいんです。小さい声で言っても構わない、言葉に詰まっても構わない、絶句しても、言いよどんでも、途中で話をやめても構わない。教師がそう保証してあげることが必要だと思います。

僕はいろいろな学校から講演を依頼されます。中学や高校だと、場合によっては体育館で話す時もあります。そういう時に気になるのは、声の響きにどれぐらい配慮しているのかということです。声を張って話さないと声が届かないというところや、マイク音が残響するところで講演を始めると、暗い気分になります。それはそのような音声環境が「気にならない」という教師と生徒を作り出しているということですから。

それに、僕が気がついたことは、音声環境が悪い学校では、先生がよく怒鳴るということです。声を張り上げないと、後ろまで声が届かないから仕方がないのかも知れません。

学校の先生は、どなたもそうですが、大きい声を出す時は声が必ずかすれます。摩擦音を多く含んだ声になる。この摩擦音を含んだ定型文を聞くと、子どもたちは恐怖心を感じてすぐに反応する。だから効果的といえは効果的なんです。そして、その成功体験が積み重ねられたせいで、先生たちは「大切なこと」を伝えようとする、つい反射的にこの耳障りな摩擦音を子どもたちに向ける。これは本当にやめて頂きたいと思います。ご本人は気がついていないんです。

前に、ある高校の先生が僕の学塾に来られて、英語教育について対談するという企画がありました。とてもおもしろい先生で、今の中等教育についていろいろ貴重な情報を頂きました。収録が終わって雑談になってから、その先生が野球部のコーチをしているという話になって、コーチとして生徒たちに話す様子を再現してくれました。すると、それまでふつうの柔らかい声で話していたこの先生が、いきなり「おい、お前ら」と声が変わってしまった。あの摩擦音の多いガラガラ声で発声するのです。

ご本人はたぶん自分が声を切り替えたことに気づいていないと思います。でも、教師は自分の声が生徒の耳にどう聞こえるかについて、もっと自覚的であって頂きたいと思います。先生が生徒たちに語りかける言葉づかいを子どもたちは模倣するわけですから。

よく「最近の子どもたちは敬語を話さない」と文句を言う人がいますが、それは周りの人たちが敬語を使っていない環境にいるからです。敬語は外国語と同じで、耳から入ってきて体にしみ込む。誰も敬語を話さない環境にいる子どもが敬語が話せないのは当たり前です。

正直に申し上げますけれど、先生たちにはきちんと授業をしたり、学級を管理したりすることよりも大切なことがあります。それは子どもたちに身に浸みるような言葉で話しかけることです。定型句を「大きな声ではっきりと」繰り返すようなことをしないで、できればその日その場でふと思いついたことを話す。途中で絶句してもいい。その時はしばらく沈黙する。そのあと話がうまく続けば続ければいいし、そこで話が途切れてしまったら、「ここでおしまい」でいい。そういう生成的な話し方を先生が実際にやってみせることの方が子どもたちのためにはずっと意味があると思います。

昨日、古い友人である高橋源一郎がNHKで「飛ぶ教室」というラジオ番組をやっていて、そこに呼ばれて二人で教育の話をしました。そしたら、大学の大教室で授業をする時に、どうすれば学生たちが寝ないで授業を聴くか、という話になりました。

教師がどれほど準備してきても、ノートを読み上げるような授業をやっていたらダメなんです。自分が既に知っていることを流暢に話しても学生は聴いてくれません。寝ちゃうんです。講義している僕自身が自分の話にもう飽きているような話は先方も聴いてくれないんです。

だから、結局高橋さんも僕も、大学の教壇に立った時には、たった今思いついたことを話す。学生たちに胸襟を開いてもらわないと授業にならない。話を聴いてもらわないと始まらない。どうやって胸襟を開いてもらうか。どうやって授業を成立させるか。それは結局、こちらの語り口だということで高橋さんとは意見が一致しました。

講演でも、演題を決めて、用意してきた原稿を読み上げるような話し方はしたくない。今思いついたことを話す。今一番気になっていることから話す。いつもどうも気になっているのだけれど、改めて正面から分析したことがないトピックが誰にでもありますよね。その話から始める。自分の話がどう転がるかわからないで話し始めると、オーディエンスは必ず集中して聴いてくれます。わかるんです。ぜんぜん用意していないことを話し出したというのは。だから、絶句するかもしれないということも

わかる。絶句しそうな人の話には誰でも耳を傾けてくれます。結婚式の披露宴でたまに祝辞の途中で何を話すか忘れて絶句する人がいますね。すると会場は水を打ったように静まり返る。全員が「がんばれ。続きを思い出せ」と内心で応援を送っている。それと同じです。講演だって、立て板に水みたいに流れるようにしゃべっている人だと、聴く方は「話がうまいね」と思うだけです。別にその人を応援する気にはならない。でも、その時思いついた話をしている人が絶句しかけると、その事態には自分もいくらかの責任があるかもしれないと思う。もっと集中して、暖かいまなざしを送りながら聴いていたら、この人もう少しうまく話が続いたかも知れないと思う。つい「親身になる」。

それは授業でも変わりません。学生の授業評価アンケートだと、僕の授業については「シラバス通りに授業をしているか」という項目は5段階評価の1。「きちんと授業の準備をしてきているか」も1なんです。学生はよく見てますよね。でも、授業評価の総合評価は5なんです。授業評価最高得点で、「年間ベストティーチャー」に選ばれたこともあります。

だから、別にシラバス通りに、きちんとノートを準備して授業する必要なんかないんです。してもいいけれど、そんな授業を学生は聴いてくれない。寝たら授業にならない。でも、その時に思いついたことをとにかく必死で話していると、学生たちは反応してくれる。うなずいたり、ペンを手にしてノートしたりする。

これが不思議なんですけれども、僕が何か面白いことを言ったので、それを記録するためにペンをとるわけじゃないんです。そうではなくて、「これから面白そうなことを言いそうだ」と感じるとペンを手にするんです。授業に没頭していると、そういう感度が高くなるんですね。そして、学生たちが一斉にペンを手にするというのは、僕がそれから話すことに対して「がんばって、面白い話をしてね」と声援を送っているという意味もあります。これはみごとな「双方向的」なコミュニケーションですよ。ね。

感度のいい状態でやりとりすること、それが学校教育では一番大切なことだと思います。ですから、学校教育はもっと短い時間でいいんじゃないかと思います。授業時間数を今の半分、あるいは三分の一くらいまで短縮して、残りは自由時間にする。学校の中の施設や設備は自由に使って構わない。先生はその辺で自分の仕事をしている。生徒が先生に聞きたいことがあって寄ってきたら、教えてあげられることは教

え、手伝えることは手伝う。でも、基本は子どもたちに任せておく。それだけでいいんじゃないかと思います。学校というのは、教師がいて、子どもたちがいて、そこに学びの場が成立しているというだけで十分だと僕は思います。

公教育は始まってからまだ200年くらいしか経っていません。公教育のアイディアはフランスの啓蒙思想の中で生まれました。アイディアを出したのはフランスのコンドルセやルソーですが、実際に公教育が最初に実施されたのはアメリカです。それも19世紀に入ってからです。

19世紀後半のニューヨーク州で学校の開設期間は1年のうちの12週間でした。イリノイとかウィスコンシンとか田舎に行くともっと短くて8週間くらいでした。どうして短いかというと、この時代の子どもたちは「小さな労働者」だったからです。4, 5歳から家の仕事を手伝い、都市なら6歳ごろから工場に働きに行かされた。

そういう環境に無理矢理公教育をねじ込むわけです。だから、とりあえず農閑期にしか学校は開校できない。農閑期になると、子どもたちにやらせる仕事が減るので、親も子どもが学校へ行くことを許可する。

でも、年間8週間の授業では、たいしたことを教えることはできません。でも、一つだけ大切なことを教えられる。それは「この世には学校というものが存在する」ということです。子どもたちに向かってこう告げることです。「君たちが知ってる世界とはまったく違う原理で営まれている場所がある。君たちの世界では、君たちは小さな労働者であり、そこではとりあえず君たちが知性的・感情的に成熟することを切望している人はいない。学校は違う。学校は君たちの人間的成熟を支援するために存在する。ここで私たちは君たちを歓待し、ひとりひとりを固有名において承認し、君たちがここにいてくれることに感謝する。」

子どもたちを歓待し、承認し、祝福すること。これが学校教育の本質だと思います。だって、「学校に来てくれてありがとう」というのは公教育初期の頃の先生たち全員が思ったことなんですから。親たちは子どもを学校なんかに行かせたくないんです。それより家や工場で働いて稼いで欲しい。そういう時代ですから、先生たちの最初の仕事は子どものいる家を一軒一軒回って、親御さんを説得することだったはずで「お願いだから、少しの期間で構いませんから、子どもたちを学校に通わせてください」と。

荻谷剛彦先生の本で読んだことですが、アメリカでも公教育はなかなか定着しなかったそうです。というのは、公教育に税金を投じることに反対した人が大勢いたからです。「なぜ貧乏人の子どもたちの教育のために税金を使う必要があるのか。私は一生懸命働いてひとかどの者になり、子どもを私立学校に行かせることができるようになった。私ほど努力しないで貧乏でいる人間の子どもを教育するために私の税金を使ってもらっては困る。貧乏人の子どもが学校に行きたいなら、まず働いて、学資を作って、それから自分の好きな学校に行けばよい。そもそも教育を受けた子どもの中で頭のよい子は、もしかすると将来私の子どもの競争相手になるかもしれない。何が哀しくて、自分の子どもの競争相手を自分の税金を使って育てなければならないのか。」そういう理屈でした。そういう公教育反対論者たちをなんとか説得して、税金を学校教育に投入する制度が整備された。

公教育導入に反対した人たちのこの理屈は「教育は商品だ」という考えから生まれたものです。学校教育を受けた子どもが、それによって知識や技能を得て、社会的な成功を収めたとすれば、教育によってこの子は大きな個人的利益を得たこととなります。もし「受益者負担」の原則を適用するなら、教育を受けた人間はそれにふさわしい対価を支払わなければならない。無償で教育を受ける権利は誰にもない、そういう結論になります。

今でも教育コンテンツは商品だと思っている人はいます。たくさんいる。保護者の多くはそう考えている。子どもたち自身も、教師の半分くらいもそう思っているかもしれません。でも、それは違います。

学校教育の受益者は個人ではありません、集団全体です。当然でしょう。もしアメリカが19世紀に高額納税者たちの意見に従って、「受益者負担」の原則を適用して、公教育導入を拒否したらどうなったでしょうか。当時アメリカの識字率は20%でした。公教育が行われず、金持ちの子どもだけが私立学校に通うという仕組みをその後もずっと続けていたら、今も識字率は似たようなものだったでしょう。ということは、アメリカは今も文化的な後進国のままだったということです。超覇権国家になるということもなかった。

知性は個人に属するものではありません。知性というのは集団な現象なんです。知性的な人が集団に一人いると、周りの人がそれに刺激されて、次々と新しいアイディアを思いつき、語り出す。黙りがちな人もおずおずと手を挙げる。というふうに、周

りの人の知性を活性化する人こそ知性的な人です。逆に、一見賢そうで、弁が立つて、博識なのだけれど、その人がいるせいで、周りの人間のパフォーマンスが下がるということもあります。その人がしゃべり出すとみんな黙り込む。新しいことを始める意欲が殺がれる。その人がいるせいで集団全体の知的生産力が下がる。そういう人のことを「反知性的」だというふうに僕は考えています。

もう一度繰り返しますが、教育の受益者は個人ではありません、集団全体です。集団全体が知性的・感性的に、さらに言えば霊的に向上していくことが教育の目的です。個人に何か役に立つ知識や技能を与えるために学校教育があると考えから、学校が子どもたちに強いストレスを与える競争の場になり、教育コンテンツが「商品」として値札がつくようになるんです。

「デモクラシータイムズ」というYouTubeのニュース番組があります。そこに僕は定期的に出演しているのですが、池田香代子さんがMCでその質問に答えるという形式なんですけれど、昨日のテーマは国立大学法人法の改正でした。

学長の上に運営方針会議というものを載せて、その中には学外者を入れるというのが改正の骨子でした。学外者が大学全体をコントロールする目的の一つは「稼げる大学」を作るということでした。まことに貧しい教育観に基づいたアイディアです。

過去30年間、教育行政は学校をトップダウンの、株式会社のような組織にしようとしてきました。でも、学校を営利企業のように編制することは不可能です。営利企業の場合、経営方針の適否はただちにマーケットが判断します。経営が失敗すれば、売り上げが落ち、収益が失われ、株価が下がる。当期利益の増減を見るだけで、経営者がしたことが正しかったか間違っていたかは一目瞭然となる。でも、教育機関には、そのような意味での「マーケット」がありません。学校教育のアウトカムは20年後、30年後にならないとわからない。その学校を卒業した子どもたちが成熟した大人になり、彼らに支えられて社会が存続していて、人々が幸福に暮らしているという仕方ではしか教育活動の適否は検証できません。株式市場のようなものは学校教育には存在しません。

だから、学校を株式会社のようなものにして適切に運営するということは原理的に不可能なんです。学校を株式会社のようなものにしようとしたら、株式市場に類するものをどこかに設定しなければならない。考えられるのは「定員充足率」とか「入学者の平均TOEICスコア」とか「卒業生の就職率」とかのような数字だけです。でも、

そのようなものはそこで行われている教育の質についてごく部分的な情報を伝えるだけであって、そんな数値で教育理念や教育プログラムの適否を判定することなんかできるはずがない。

神戸女学院在職中、毎週開かれる部長会で、ときどき経理部長が寄付金の報告をしていました。毎月のように卒業生からの寄付がありました。遺産を母校に寄贈してくれる卒業生がいるのです。80代90代の卒業生が、人生を振り返って、自分の一生を豊かにしてくれたのは母校の教育だったと思って、その感謝の気持ちを寄付として贈ってくれる。貯金の一部を寄付してくれる人もいるし、土地建物をまるごと遺贈してくれた人もいます。母校に対する感謝の気持ちが確定するまでにはそれくらいの時間がかかるということです。学校教育のアウトカムを評価するのは卒業生ひとりひとりであって、一般的な評価基準などというものは存在しません。

「稼げる大学」を目指す人たちはおそらく、学校教育の生み出した価値は簡単に数値的に表示できていると思っているのでしょう。ですから、学校に対して「自分たちの教育が成功していることの証拠になる数字をいいから早く出せ」と要求してくると思います。その数字に基づいて学校を格付けし、格付けに基づいて教育資源を傾斜配分する。でも、学校教育のほんとうの価値は、そのような外形的なデータでは計量することができません。そこで学んだ人たちが自分の人間的成熟という仕方で血肉化したものを数値的に示すことはできません。

同じ学校で学んだ人たちであっても母校に対して抱く思いはそれぞれに違います。僕自身は自分が卒業した大学にほとんど何の感謝の気持ちも抱いていません。卒業した後には近づいたこともありません。寄付をしたこともありませんし、遺産を贈る気もありません。たしかに大学ではよい友だちと出会うことはできましたが、大学教育の中味については何の恩義も感謝の念も感じません。もちろん、僕とは違って、あの大学が大好きだ、その教育に深く感謝しているという人もいます。ひとりひとり学校教育への評価は違うし、違って当然なんです。でも、世間の人たちは大学を一律に評価できる数字があると思っている。

僕はそんなものは学校教育にとって本質的だとは思いません。僕たちの暮らすこの社会はたしかに資本主義市場原理によって営まれていますけれど、学校はそれとは違う原理で営まれている。学校は子どもたちを歓待し、承認し、祝福し、その市民的成

熟を支援するためにあります。子どもの味方をするところです。子どもにとって「逃れの街（アジール）」になるはずのところでは。

しかし実際にはそうになっていない。不登校という現象を見ればわかります。先日新聞を読んだら、不登校児童生徒が29万9000人とありました。先日のある講演の時も、講演後にお母さんと中1の息子さんが来られて、お母さんに、「この子は内田先生の本を読んで不登校になっちゃいました。」と言われました。今の学校制度では不登校を選ぶ子どもの方が健全かもしれないと言ったら、お子さんの方は「僕は健全だから学校が耐えられないんだ。」と答えていました。そうだと思います。

街を歩いていると学習塾の看板がいっぱいありますけれど、その中に「個別学習」という看板をよく見かけます。「個別学習」って何だろうと思っていたら、不登校の子どものための学習塾だと教えられました。学校には行けないけれど勉強はしたい、そんな子どもたちのための学習塾です。クラスで級友に囲まれて勉強することには強いストレスを感じるけれども、先生とマンツーマンだったら勉強できる。通信制の学校も増えています。いろいろなオルタナティブがあって、不登校になっても学び続けられる場所があることは、子どもたちにとってはよいことだと思います。

子どもたちが学校から離れてゆくのは、学校に求心力が足りないからです。カリキュラムの良し悪しとか、先生の教育力がどうかとかということじゃないんです。学校が子どもたちにとって、通うのにハードルの高い場所になっているということが問題なんです。これは「お願いだから、学校に来て」という先生たち呼びかけが足りないせいなんじゃないでしょうか。不登校になる子どもたちはむしろ「学校に来るな」という無言のシグナルを感じているように思います。

「来るな」というとちょっと極端ですけど、何らかの条件を満たしたら学校に来てもいい、クラスにいてもいい、名前を覚えてやってもいい、学ぶ権利を認めてやる…というのは違うと思うんです。これこれの条件を満たした者だけ学校に受け入れるということではなくて、学校は原理的には無条件で子どもたちに開かれていなければならない。制度的には難しいかもしれませんが、せめて心だけは無条件で子どもを歓迎して欲しい。

不登校になったけれど個別学習なら行けるっていうのは、そこがとりあえず子どもたちを無条件に受け入れている場所だからだと思います。教える人は学生バイトかも

しれないし、あまり教科についての知識がないかもしれない。でも、フレンドリーに子どもに接して、学習指導要領に決まったことをやるのではなく、その子の学力に合わせて進度を変えることができるなら、子どもたちはここには「受け入れられている」と感じる。そういうことが起きているのかも知れません。

でも、オルタナティブ・スクールの最大の問題点はお金がかかることです。お金のあふ家の子どもは不登校になってもそういう救済措置がある。けれども、貧しい家の子どもが不登校になった場合には、この救済措置がない。学校に対する同じリアクションでも、一方は救済されて、他方は救済されない。経済格差が教育格差にダイレクトに反映してしまう。30万人の不登校の子どものうち、オルタナティブで救済されているのはどれくらいでしょう。5万人か10万人か。だとすると、残りの子どもたちは救いが無い。不登校になったままその後二度と学校というものに触れる機会がなく終わってしまうかもしれない。

30万人の不登校者がいるんです。彼らに向かって学校の先生が言うべき言葉は「学校に戻って来て」ということに尽きると思うんです。「学校に行ったら何かいいことがあんですか?」と訊かれたら、「ここは君たちの成熟を支援するところです」と答えればいい。ここは君たちが成長するのをひたすら支援するためにあると。

ヨーロッパで、最初に子どもたちのために学校を作ったのはイエズス会でした。イエズス会が学校を作った理由は、親の虐待から子どもを守るためでした。近代まで子どもには人権が認められていなかった。ですから、親は自分の子どもにしばしば体罰を加えたり、行きすぎて殺すこともあった。イエズス会が学校を作ったのは、何よりもまず親の虐待から子どもを守るためでした。

親も子どもどちらも主の被造物である。その意味では等格である。だから、親には子どもを殺す権利はない。そういうところから近代における学校は始まったわけです。子どもの生命を守る、子どもの成長を支援する。まずそのために学校はある。付加価値をつけるとか、労働市場に送り出された時に有利になるように知識や技能とかを付加するために学校は作られたわけじゃありません。そのことを思い出して欲しいと思います。

先々週、韓国の釜山大学に呼ばれて講演をしてきました。与えられた演題は「地方消滅時代におけるキャリア教育」というものでした。僕は「キャリア教育」という言葉が大嫌いで、大学在職中もキャリア教育なんか意味がないとずっと言ってきたので

すけれど、今回はキャリア教育についての学会に呼ばれたので、仕方なくその話をしました。

釜山は韓国第二の都市ですけれども、急激な人口減に苦しんでいます。若い人たちがソウルに一極集中しているせいで、釜山のような地方都市にはもう若者がいなくなっているのです。実際釜山の街を歩いてみると、街を歩いているのは中高年者ばかりなんです。若い人がいない。子どもの歓声も聞こえない。

そこでキャリア教育の国際学会があったのです。僕の前に講演をしたのはボストン大学から来た人で、これがまことにつまらない発表でした。キャリア教育における基本の問いは「Who am I?」なんだと言うんです。キャリア教育というのは「本当の自分」を発見することだ、と。その「本当の自分」を探し当てるためのフローチャートのようなものがあって、それをパワーポイントで映し出して、このチャートをたどってゆけば「本当の自分」を発見できる。そうすれば万事オッケーという発表でした。

「教育は『自分探しの旅』を扶ける営みと言える」というのは、1997年の中教審答申に初めて出て来たフレーズです。当時「自分さがしの旅」というフレーズにつよい違和感を覚えたことを記憶しています。このアイディアそのものはアメリカから輸入されたものです。

アメリカ由来の「自分探しの旅」がその頃から教育の主目標になったわけですが、それは日本では「将来どういう職業に就くのか」という問いにまで矮小化されてしまった。できるだけ早い段階で自分のキャリアについてイメージをもって、15歳くらいで将来何になるか決める。どんな学科に行って、どんな専門的知識やスキルを身につけて、どういう職業に就くかをできるだけ早く決めること。それが「自分探しの旅」であり、それを「扶ける」ことが教育の本務だと、そういう理解にまで縮減してしまった。

前に『ドリーム・ハラスメント』という本を書いた方がいて、帯文を頼まれたので、ゲラを読みました。すると、高校生たちが夏休みに「9月までに将来の夢を決めてこい」という課題を出されると暗い顔をするということが書いてありました。ふつう、「将来の夢を語る」って楽しいことのはずなのに、なぜ高校生たちは暗い顔をするのか、という問いから始まっていました。高校生たちが「夢を語れ」と言われると

暗い顔になるのは当然なんです。彼らに求められているのは「夢」ではなくて、単なる「職業選択」のことだからです。

高校生にそんなことを強いるのはほんとうに気の毒だと思います。彼らは世界が広いことを知らないし、この世にどんな職業が存在するのも知らない。たぶんこの世に存在する職業の100分の一くらいしか知らない。その段階で、手持ちのわずかな知識だけで自分の将来を決めろと言われる。決めたら、あとはわき目もふらずに勉強しろと言われる。それはただ自分で決めた「タコつぼ」に早く入れと言われているようなものです。暗くなるのも当たり前です。

釜山の学会で会ったアメリカ人学者も「本当の自分」を見つければキャリア教育はオッケーですという話をしていましたけれど、僕はこれはとても偏った考え方だと思います。なんとなく「そういうものか」と呑み込んでしまう人もいるかもしれないけれど、「自分らしさ」、自分の独自性を早く発見して、それを磨きましょう、というのは実に危険な考え方だと思います。15歳くらいの子どもに、自分のオリジナリティなんてわかるわけがないんです。まだ形成途上なんですから。

LGBTの問題でアメリカ社会が大騒ぎになっていますけれど、理由の一つは自分のジェンダー・アイデンティティーを早く決めろという圧力があるせいだと思います。お前は男なのか女なのかトランスジェンダーなのか、早く「性的に本当の自分」を見つけろという圧力が子どもたちにかけている。これは酷だと思います。性自認なんて揺れ動くに決まっているからです。環境によっても変わるし、支配的なイデオロギーによっても影響されるし、友だちや読んだ本にも影響される。性自認が落ち着くまでは、そっとしておいてあげればいいじゃないですか。

そもそも「自分探し」という考え方は東洋の教育的伝統の中にはありません。孔子の言葉に「述べて作らず。信じて古を好む」というものがあります。「私は自分のオリジナルな見解を述べているわけではなく、私が語っているのはすべて先賢の教えである」という意味です。これが東洋における知的な態度の基本です。私は大いなる知恵の通り道に過ぎない。ですから、教育の課題は自分をいかにして「質の良い通り道」にするかということになります。先賢の教えを毀損することなく、できるだけそのままに次の世代に伝えられる「良導体」として自分を仕上げてゆくこと、それが自己陶冶であるというのが東洋の伝統的な考え方です。ですから「我執を去る」ということが求められる。我執があると、それが「抵抗」になって、先賢の教えを後世に伝

える時の邪魔になる。「本当の自分に出会う」どころじゃなくて、「自分を捨てる」のが東洋的な人間の成長の物語です。

老子に「大方無隅 大器晩成 大音希聲 大象無形」という言葉があります。「大きなものには隅がない、大きな器は完成に時間がかかる 大きな音は聴き取れない 大きなものには形がない」という意味です。とにかく人間については偏りのない、定型に収まらないスケールの「大きさ」に価値を見出す。これは西洋にはたぶん見ることのできない考え方だと思います。

何が器を大きくすることの妨げになるのか。我執が「大きくなる」ことの邪魔をする。我執が自分の成長を妨げる。だから我を捨てなければならない。「居着くな、自分を手離せ」というのが、東洋における人間的成長のための導きの言葉でした。「アイデンティティーを見出せ」という人間観とは方向が正反対です。

「呉下の阿蒙」という話があります。『三国志』に出て来る逸話です。呉に呂蒙^{りよもう}という将軍がいました。大変な勇猛な軍人でしたが、惜しいかな学問がない。呉王の孫権がそれを嘆いたところ、呂蒙将軍は発奮して、猛勉強するようになる。ある日かつての同僚の魯肃^{ろしゆく}が訪ねてきてみると、呂蒙将軍はその見識といい教養といい別人のようになっていた。以前は「呉下の阿蒙（蒙ちゃん）」と軽んじられていたのに、今はその片鱗もない。それを聞いて呂蒙は「士別れて三日すればすなわち刮目^{かつもく}して相待すべし」という有名な言葉を口にするわけです。「人間は三日経つと別人になる。だから、目を見開いて相対しなければならない」と。

これが東洋的な自己陶冶の典型です。三日経てば別人になる。この成長は終わることがない。自己刷新がどこまでも続く。それが修行、修養ということです。「自分探しの旅」とはまるで違う。日々、前の日とは違う人間になってゆく。日々、器が大きくなる。別に教養が身についたとかいう量的な増大のことではありません。「教養がある」というのは、先賢の教えを受け容れ、それを流出する「良導体である」ということです。

昨日元NHKディレクターだった湊剛さんという方にお会いしました。湊さんは僕の大好きな音楽家で、先年亡くなった大瀧詠一さんの特番をFMラジオでたくさん作った方です。その湊さんと大瀧さんは本当にいろんな曲をパクったよねという話をしました。大瀧さんはアメリカの50年代末から60年代初めのポップスが大好きでしたけれ

ど、そのヒットソングの中からいろいろなフレーズを採ってきて、それを自分の楽曲に組み込んでいました。一曲まるまる同じという作品さえありました。アニメ「ちびまる子ちゃん」の主題歌『うれしい予感』はアメリカのガールズグループ、Pixies Threeのヒットソング『Cold, Cold Winter』とほぼ同じです。でも、これを大瀧さんは意図的にやっているんです。大瀧さんは「オリジナル神話」を強く批判していました。我々が作る楽曲はどれも全部先人から受け継いだものであって、純粹にオリジナルなものなんかない、そうラジオで繰り返し語っていました。大瀧さんは自分の曲に採り入れた先行作品のことを「下敷きソング」と呼んでいました。下敷きの上に白い紙を置いて、透けて見える絵柄の上に自分の絵を描く。自分が作る一曲には「下敷き」にした曲が20個くらいあるから、それを探し出してごらんとリスナーたちに「クイズ」を出していました。僕たち大瀧さんの熱心なフォロワーのことを「ナイアガラ」と呼びますが、ナイアガラたちは必死になって大瀧さんの曲の「下敷き」を探しました。どこからヒントを得て、どの曲のどのフレーズを入れ込んだか、それを当てるのがナイアガラの楽しみでした。僕もある時大瀧さんが作曲したうなずきトリオの『うなずきマーチ』の「下敷き」がDave Clark Fiveの『Wild Weekend』ではないかとふと思い至り、それをツイッターに書いたことがあります。すぐに大瀧さんからメールがあって「これを発見したのは内田さんが世界最初です」とお褒めの言葉を頂きました。実は大瀧さんご自身も自分の曲がDave Clark Fiveにインスパイアされたものだということに気づいていなかったのです。

孔子の「述べて作らず」という言葉をさきほど紹介しましたが、大瀧さんはまさに音楽の世界で「述べて作らず」を実行していたのだと思います。「私の音楽は、かつての偉大な先人たちが作り上げてきた音楽を受け容れ、次の世代に贈るものだ。私の音楽は私の自己表現ではなく、素晴らしい音楽たちの通り道である」と、そういうふうに考えていたのだと思います。だから、僕が二十代の頃から大瀧さんの音楽を聴き、ラジオ番組を聴き、わが「師匠」と見立ててきたのは、大瀧さんが実践されていたのが東洋的な修行に通じるものだったからだとは今思います。

僕の友だちに三砂ちづるさんという人がいます。疫学の専門家で、今は津田塾大学の先生ですが、若い頃は長くブラジルで暮らしておられて、小学生の子どもを二人連れて帰国しました。お子さんたちは日本語の会話に支障なかったのも、近くの区立小学校に入れました。ある日上の男の子が家に帰ってきて、「お母さん、今日すごく変なことを訊かれたのだけれど、意味がわからなかった」と言った。どんな質問だった

のか三砂先生が訊くと「君は将来何になりたいか」という質問だったそうです。彼はブラジルにいた間、大人から一度もそんなことを訊かれたことがなかったので、びっくりしてしまったのです。三砂先生は、これは日本固有の病気だと言っていました。十歳やそこらの子どもに将来就きたい職業を訊くなんてまったくナンセンスだと僕も思います。僕も小さい頃によくそう訊かれましたが、その質問が大嫌いでした。何になりたいのかなんかわからないから。だから、適当に大人が納得しそうな職業名をそのつど思いついて答えていました。僕は結局武道家になったわけですが、そんなものになるなんて子どもの頃には思ったこともなかったのですから、無意味な質問です。

職業というものは自己決定できるものじゃないと思います。ご縁があればその職業に就くし、ご縁がなければ就かない。どんな職業に就くのかは偶然なんです。だから学生たちには、君たちはいずれ「天職」に出会うことになるけれども、それは自己決定できないということをずっと言ってきました。

「天職」は英語ではcallingとかvocationと言います。どちらも「呼び声」という意味です。自分で見つけるものではなくて、呼ばれるものなんです。呼び声に従って、そこで求められている仕事を果たすこと、それが「天職」に就くということです。その話を釜山大学のキャリア教育の学会でもしました。

人を天職に誘う呼び声の基本形は「助けて」です。僕たちは救難信号だけは聞き逃しません。「助けて」という声が聞こえたら、自動的にそちらに向かって走り出して、救援を求めている人に手を差し出す。その時人は「天職」に出会う。そういうもののなんです。自分自身を顧みても、他の人たちの事例を見ても、決定的な転機になるのは、誰かの「助けて」というシグナルを聴いてしまったことです。

救難信号は、だいたい細かい声で発せられます。「大きな声ではっきりと」救難信号は発されない。ですから、周りに人がたくさんいても、誰にも聞こえず、自分にだけに聞こえるということがあります。「あ、助けを求めている人がいる」と自分にはわかる。でも、周りは誰も気づいてない。救難信号を聞き取ったのは自分だけらしい。それで「何かお困りですか」と言うと、「ちょっと手を貸してください」と言われる。その時に人は「天職」に出会うんです。自分にしか聞こえないから「天職」なんです。みんなに聞こえて、みんなが駆けつけてしまったら、「天職」じゃない。倍率100倍とかいう就職試験に殺到する人たちは、誰も呼ばれていないということで

す。みんなに聞こえる救難信号というのは存在しないからです。この話には釜山大学の学生院生たちも聞いていました。

もしほんとうに「キャリア教育」というものが必要だと思うなら、知識や技能を教えるのではなく、「耳を澄ませて、他の人には聞こえないけれど、君の耳にだけは聞こえる『助けて』というメッセージを聴き逃さないように」と教えるべきだと思います。それが人を「天職」に導くんですから。

vocation は「天職」と訳されることもありますが、宗教用語では「召命」という意味です。「神に選ばれて、ある事業を託されること」です。創造主からミッションを託されることです。

『聖書』によると、創造主からの呼びかけを預言者や族長は聴き取るわけですが、この呼びかけもやはり一種の「助けて」なんだと僕は思います。主は宇宙を創造してから何十億年もの間、待ち続けていた。「この世界を創造したのは創造主である」ということに気づいて、その偉業に驚嘆し、感謝し、崇拝する被造物が登場するのをずっと待ち続けた。そして、ある時アブラハムという若者が主の声を聴き取って、「私はここにいます」と答えた。主からのメッセージを聴き取ることでできる被造物がこの時はじめて登場した。ユダヤ教はそう教えています。ある一人の人間が主からの「助けて」を聴き取った瞬間に一神教が成立する。僕はこのユダヤ教における「召命」の物語をととてもよい話だと思います。主でさえ助けを求めている。そして、主の救難信号を聴き取ったアブラハムはその時に自分の召命を知る。ですから、「助けて」というシグナルを発信するのは別に弱い人には限らないということです。

今、異常気象で、パンデミックで、人口減少で、地政学的な危機があって、AIテクノロジーが暴走して先行き全く見えないという時期に、「キャリア教育」というお題で「一生食いつぱぐれない職業は何ですか？」と訊かれても、僕にははかばかしいお答えはできません。そんな職業を探してもたぶん無駄です。それよりは、自分の助けを求める声に耳を傾ける方がいい。

武道には「^{しんに}心耳を澄ませて無声の声を聴く」という表現があります。「無声の声」というのは聴覚では聴き取れないシグナルという意味です。だから耳だけでなく、皮膚感覚も鋭敏にして、誰かからの「助けて」を聴き落とさないようにする。

孟子に「惻隱^{そくいん}の心は仁の端なり」という言葉があります。子どもが井戸に落ちかけたので、思わず手を出す。その時には「この子を助けたら親から感謝されるだろう」とか「この子を助けないと周りの連中から薄情者と罵られるだろう」とか、そういうことを思量せずに、計算抜きで思わず手が出る。それを孟子は「惻隱の心」と呼びました。そして、最高徳の出発点はこの惻隱の心にあるとしたのです。孟子も同じことを言っているんです。助けを求める声に反応して、何の計算も抜きで思わず手を差し伸べる。その行為を孟子は「仁の端なり」と言ったわけです。そうやって人は「天職」を見出すのだと思います。

学校の先生の最初の、最も大切な仕事は子どもたちに向かって「学校に来て」と告げることだとさきほどから申し上げています。それは「助けて」ということです。不登校の子たちがこれだけいるというのは、先生たちが本気で「助けて」って言っていないからだと思います。「お願いだから学校に来て欲しい。君たちがいないと学校が始まらないんだ。学校に来て、君たちの笑い声で教室を満たしてくれ。」そういう救難信号を子どもたちが聴き取ってくれたら、そこから学校教育が再生する。僕はそう思います。

僕は大学の教師を35年ほど、合気道という武道の師範を40年近くしてきました。大学の教師としては、結局僕の学統を継いでくれる弟子を育てることはできませんでした。でも、道場で武道の道統を継いでくれる弟子には恵まれました。合気道では僕を超えてゆく門人たちがすでにたくさんいます。それを見ると、道場というシステムが教育のシステムとしては大学よりもすぐれていると僕には実感されます。

道場が学校と違うのは、まず学年がないということです。今日入門した初心者も30年稽古してる人も、同じ道場で、同じ時間に、同じ技を稽古する。もちろんひとりひとり練度は全く違います。技の理解も違う。稽古の課題も違う。初心者はそもそも自分が何をしているのかさえわからない。ある程度稽古を積んで、半分目が開いた人は、半分目が開いた分、稽古の意味が分かる。そういうものです。全員が同時に同じことを理解する必要はないし、そもそもそんなことは不可能です。それでいいんです。同じ技を稽古しながら、それぞれが自分のための稽古をしている。

もう一つ、これも師匠から教えて頂いたことですが、道場では決して門人たちの相対的な優劣強弱巧拙を論わないこと。誰それは誰それよりうまいとか、強いとか、そういうことは決して口にしてはいけません。そう教わりました。

「蓋し兵法者は勝負を争わず、強弱に拘^こらず、一步を出ず一步を退かず、敵我を見ず、我敵を見ず、天地未分、陰陽不到の処に徹して直ちに功を得るべし」というのは澤庵禅師の言葉ですが、武道家が最初に教えられるのは、勝負を争ってはいけないということです。相対的な優劣を論ってはならない。

競技武道は試合があったり、ランキングがあったりしますが、僕が稽古している合気道には試合がありません。ただ修行するだけです。でも、試合がない、勝敗優劣巧拙を競わないと上達しないということはないんです。試合なんかなくてもどんどんうまくなるんです。むしろ、相対的な優劣で一喜一憂するというストレスがないので、のびのびと心を開いて稽古できる。一緒に稽古している人たちは「競争相手」ではなく、「修行の仲間」ですから、惜しみなく教え合う。

道場には、いつまでに何を習得しなければならないという学習指導要領もないし、学年もないし、成績もない。その点が学校と違います。僕はそうやって千人を超える弟子を育ててきました。弟子の中には、自分の道場を持って自分の弟子を育てている人がもう何人もいます。僕より上手い人、僕より技が効く人、僕より術理の理解が深い人も、門人には何人もいます。でも、彼らを育てたのは僕です。弟子はしばしば師のレベルを超えるし、師が教えていないことまで学んでしまう。そういうものなんです。それが「教育の奇跡」です。合気道の道場では僕はその奇跡に日々立ち会っています。これは大学ではついに経験できなかったことでした。

僕の道場では、畳に座卓を並べた「寺子屋ゼミ」というものもやっています。これは大学院のゼミの続きなので、30年ぐらいになります。もちろん、ここでもゼミ生たちひとりひとりについて、その相対的な優劣を論じるということはありません。

ゼミでは毎回発表者がいて、それについて僕がコメントし、ゼミ生たちがそれぞれ意見を述べる。別に単一の「正解」にたどりつくためにゼミをしているわけではありません。発表者が提起した論点をめぐって、ひとりひとりが考えを深める。それがゼミの目的です。ゼミ生たち全員の知的なパフォーマンスが向上することをめざしてゼミをしている。これも教育活動としてはなかなか成功していると思います。

先日、日本体育学会というところに呼ばれて講演をしました。集まっていたのは大学の体育の先生たちです。その大多数はかつて優れたアスリートだった人たちです。その後大学院に行って博士号を取って、大学の教員としてのセカンドキャリアを成功させている人たちです。全員が運動能力については標準以上の人たちです。でも、そ

ういう人たちは構造的に見落とすものがあるのではないかというところから講演を始めました。

みなさんはもともと身体能力が高い。だから、体育教育はどうあるべきかを考える時には、どうしても生得的に身体能力が高い子たちの能力をさらに伸ばすためにはどうすればよいかをまず考えてしまうと思います。でも、子どもたちの半分は学校体育で「運動能力はふつうか、平均以下」と査定されています。子どもたち全体の8割か9割を占める身体的に凡庸な子どもたちの中に蔵されている可能性をどうやって発見し、発現させるかという研究には、みなさんはたぶんあまり興味がないのではないかと思います。そう申し上げました。

でも、「自分は運動ができない」と思い込んでいる子たちの中に、思いがけない可能性が潜んでいる。それは武道を指導してきてしみじみ思い知ったことです。この隠れた身体資源を掘り起こして、発現させることもまた体育教育としては、非常に重要な目標ではないか。でも、みなさんは世界的なアスリートを育てることには関心があるけれど、「自分は運動能力が低い」と思い込んだせいで、発現機会を失った膨大な身体資源の発掘には興味を示さない。それはおかしくないですか。体育学会はそういうことにも目を向けるべきだと思う。そういう話をしました。

僕の主宰する凱風館には、学校体育では5段階評価で2とか3しか取れなかったという人がたくさん来ています。身体が虚弱で、中学高校では全く運動することが許されなかったという人もいます。そういう人たちは、学校体育ではずっと低いスコアをつけられてきた。彼ら彼女らにとって体育というのはただ査定と格付けで屈辱感を感じるだけの教科だったわけです。ですから、道場という、他の人たちとの強弱巧拙遅速をうるさく問われることのない環境で、査定的なまなざしで見られずに自分の身体能力の開発だけに集中できるという環境に置かれると深く安堵することができる。そして、別人のように武道家として仕上がってゆく。

ときどき、教師にとって一番必要な資質は何でしょうと訊かれます。僕は「忍耐力と楽観です」と答えることにしています。今は教育にとって非常に困難な時代ですが、忍耐力と楽観があればなんとかしのいで行けるかなと思います。政治家から産業界からの教育を管理しようとする圧力はすさまじいものですが、この外からの圧力に抗い、子どもたちを守り、何とかして日本の未来を支える子どもたちを育てて

っていただきたいと思います。僕も頑張りますので皆さんも頑張ってくださいです。ご清聴ありがとうございました。

＜質疑応答＞

Q1 日本では「遊ぶ」ということにマイナスなイメージを持ちがちだが、遊びの中にこそ学びがあると考えている。遊ぶことについての先生のお考えをお聞かせください。

A 「遊び」っていろいろな意味がありますが、「隙間」という意味もありますよね。僕は隙間ってすごく大事だと思います。学校の中に「ミステリーゾーン」があることはとても大切だと思います。謎の部分、暗がり。それは教師の目が届かない、管理できない空間ですけれども、嗅覚の良い子どもたちはそういう場所に引き寄せられる。管理されている空間を逃れて、安心できる場所は学校内に制度的に必要なだと思います。

さきほど話したように、僕はヴォーリスの建築の中で21年間暮らしてきました。ヴォーリスという人はほんとうに子どもの心がわかってる人だなと思うことがしばしばありました。校舎の中に「ミステリーゾーン」が仕掛けてあるんです。変なへこみとか、変な階段とか、隠しドアとか、隠し部屋とか。そういうものが仕込まれている。ヴォーリスは「学舎が人を作る」という名言を残しましたが、ほんとうにその通りでした。校舎の中を歩いている時にふと「変なもの」を見つけた学生は、そのドアを開けたり、階段を上ったりして、思いがけない場所に出る。そこで学生たちが経験するのは、ほとんどの場合「いつも見慣れた風景を別の視点から見る」ということなんです。ふつうの学生は校舎の中にさまざまな仕掛けがあることに気がつかずに卒業してしまう。でも、好奇心の旺盛な学生は、隠し3階とか、隠しトイレとか、隠し屋上とか、ヴォーリスが遊び心で仕掛けたさまざまなミステリーゾーンに出会って、そこを「隠れ家」にすることができる。

保健室登校というのがありますよね。教室には行けないけれど、保健室には行けるという生徒がいる。それは保健室が医療原理の支配する空間だからですね。教室とは違う原理が貫徹している空間だということが子どもにもわかる。

ですから、図書館もできたらミステリーゾーンになって欲しいんです。学校に来て
も教室の授業には出たくないけれど、図書室で本を読む時間は楽しいという生徒がい
ますよね。それは図書館には知について教室とは違う「ものさし」があることが子ど
もにも直感的にわかるからです。図書館はそういう子たちのためのミステリーゾーン
になってもらいたい。

他にもいろいろあり得ると思うんです。美術室とか音楽室とかは「芸術の原理」の
空間ですから、スコアを競う教室とは違う空気が流れている。そういうふうの一つの
学校の中にいくつもの「別の原理」で営まれる空間を制度的に担保しておいて欲しい
と思います。

ヴォーリズの仕掛けたミステリーゾーンは「遊び」であり「隙間」でしたけれど
も、何より「自分がふだん見慣れた風景をまったく違った視点から見る」という経験
でした。学びの比喻としてこれほど適切なものはないと思います。

**Q2 20年来のファンなのでいろいろな媒体で内田先生のお話は聞いている。今日気
づいたのだが、お話されている間に、先生はよく手が動くだけでなく体で話されてい
るなと思ったし、こちらの受け取りも違うと感じた。頭でしゃべらず体で語るとい
うことにコツのようなものがあるのか、また自分を熟達させる方針があったら教えてく
ださい。**

A こういう場で話していても、「届く声」と「届かない声」があるんです。「届く
声」というのは、別に声が大きいという意味ではなくて、発声の時に他の身体部位も
連動している声なんです。咽喉だけでなく、頭骨も胸骨も胸腔も腹腔も筋肉も、みん
な震動する。身体各器官はそれぞれ固有振動数が違い、出る音の波形が違いますか
ら、遅速が生じる。その結果、一人で話しているのだけれど、複数の人間が話してい
るように聞こえるということが起るんです。

僕は観世流の能楽を27年稽古していますけれど、謡というのはまさに「一人オーケ
ストラ」なんです。全身から音質の違う音を出す。そして、これは長く稽古してき
て、長く能舞台を見てきてわかったことなんですけれど、震動する身体部分が増える
ほど話に説得力が増す。見所で聴いていて、意味がわからないままに謡の詞章が「身
に浸みて来る」ということが起きるんです。

だから、教師として教壇で話す時も、こうして講壇に立って話す時も、聴いている方たちには話が「身に浸みて」欲しい。そのために一番必要なのは「正直に話す」ということなんです。謡と同じで、話している時に全身の身体部位も同時に震動してくれないとダメなんです。そのためには自分自身が納得していることを言わなければならない。頭の中ではつじつまが合っている話だけれど、身体が納得しない、腑に落ちないということがあります。そういう話は聴き手に「届かない」。

ご指摘のように、自分の話に自分自身が納得していると、他の身体部位も反応して、手指まで動いてくるんです。自分で納得できる話、自分でしみじみ「そうだよな」と思う話をしていると、そうなるんです。

Q3 明星学園小学校で担任していますが、内田先生に今日お聞きしたいと思っていたことは、明星に期待することとか希望を感じたことがありますか。世代の入れ替わりや社会情勢も含め自分たちの教育を見直す時期に来ています。この学校に期待するところはどんなところですか。

A 具体的なカリキュラムとか教育方法については現場の先生が一番よくご存じですから、「期待すること」を訊かれたら、「好きにやってください」という他にはないです。

もう10年以上前のことですが、大阪市の平松邦夫市長から教育特別顧問を委嘱されたことがありました。委嘱状の発令日に記者会見がありまして、新聞やテレビの取材を受けました。その時に申し上げたのは、市長の特別顧問になりましたけれど、市長にお願いすることは、教育に口を出さないで欲しいということでした。平松市長が教育について立派な見識をお持ちであることは僕はよく存じ上げています。けれども、それでも教育のことはできるだけ現場に任せて、行政は現場から「こうして欲しい」という要望があったら、できるかぎりその要望に応じるということだけにとどめて欲しい。そう申し上げました。

市長が教育制度に手を突っ込むことが許されるなら、次の選挙で選ばれた市長もまたぜんぜん違う改革をするかも知れない。そんなことが続けば現場が混乱します。教師も困るけれど、最大の被害者は子どもたちです。学校教育というのは惰性の強い制

度ですから、急激な変革になじまない。ですから、市長は現場を支援する以上のことはしないでいいです。そう申し上げました。

実際に次の選挙で平松さんに代わって選ばれた市長が政治主導の大胆な教育改革を行い、そのせいで、大阪市の教育は壊滅的な事態になったことはみなさんご案内の通りです。